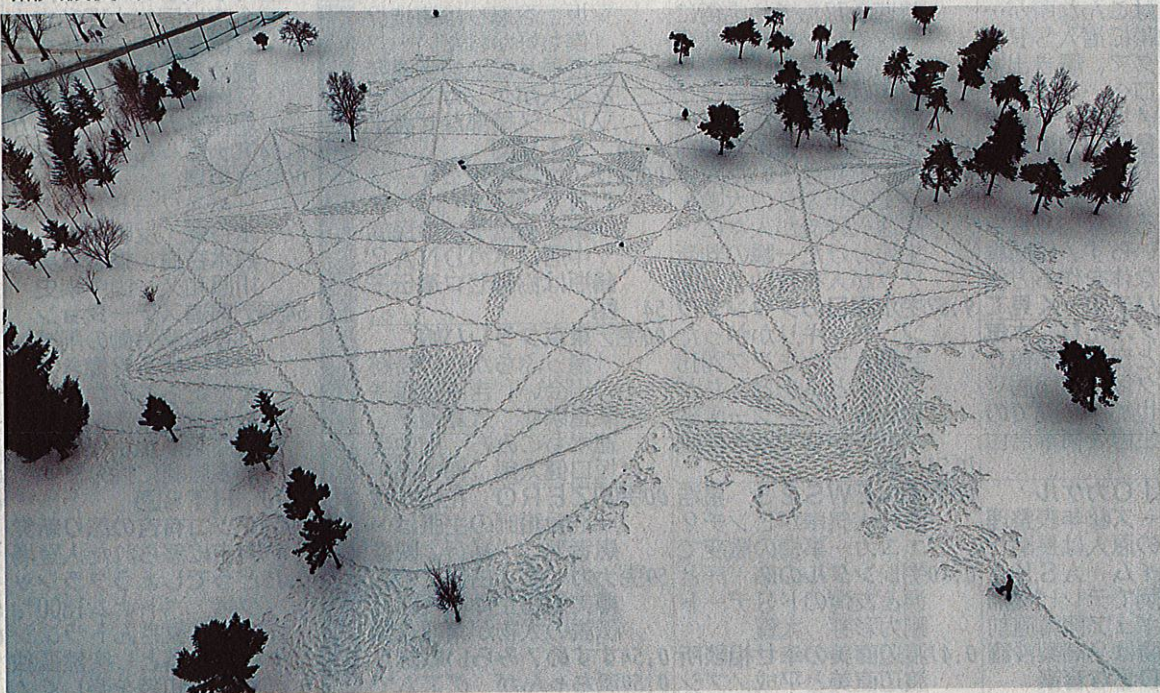


2017年(平成29年)2月15日(水曜日)

足踏み6時間 空から見ると…

サイモン・ベックさんが雪原を踏みしめることで姿を現した巨大なスノーアート＝14日午後3時40分、東川町(小型無人機使用、野沢俊介撮影)



英男性 東川でスノーアート

【東川】まっさらな雪が積「スノーアート」が14日、上もった大地を踏み固めて描く 川管内東川町のゴルフ場「コ

ート旭川カントリークラブ」に登場した。小型無人機で上空から撮影すると、雪の結晶のような巨大な幾何学模様が浮かび上がった。作品は雪が降れば1日で消えることもある。

スノーアート第一人者の英国人サイモン・ベックさん(58)に制作方法を伝授してもらおうと、ひがしかわ観光協会が招いた。道内でベックさんの作品が肉眼見えしたのは初めて。

スノーシューをつけたベックさんは約100以四方の「キャンバス」内を1分間に93歩のペースで黙々と歩き、午前11時から6時間かけ作品を制作。地形を見ながらデザインを頭の中で思い描き、方位磁石を手に目印として上着数着を雪の上にあちこち置いて歩き続けた。「程よい雪の硬さで満足。うまくいった感触がある」と笑顔で話す。

同町は16日、一般公募の30人が雪の積もった田んぼの上にスノーアートを描くイベントを企画しており、ベックさんもアドバイザーとして参加する予定。

電子版に
動画



足跡そろえきれいに

スノーアート ベックさん講座

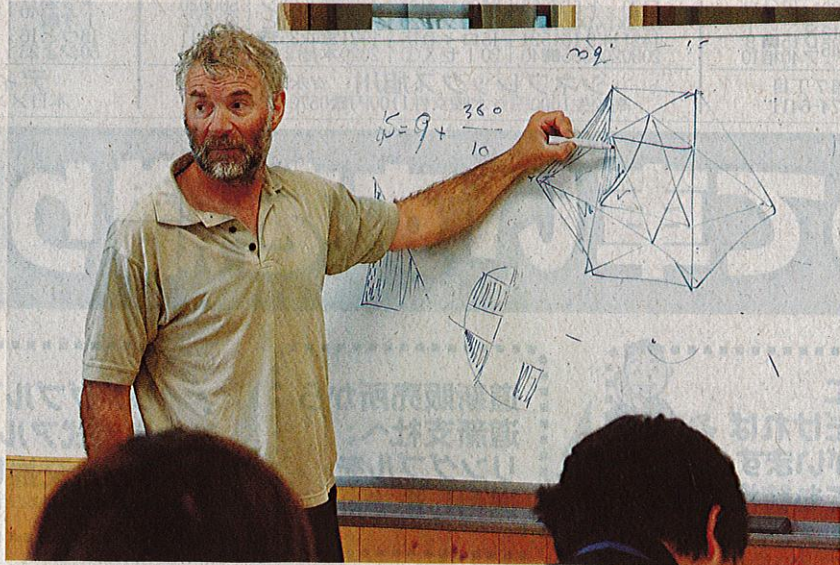
東川

【東川】広大な雪原を踏み固めて描く芸術「スノーアート」の第一人者で、英国人のサイモン・ベックさん(58)が講師となり、アートの作り方を指導する講座が15日、町森林体験研修センターを主会場に、2日間の日程で始まった。上川管内や札幌のアウトドアガイドらが雪上の芸術の描き方を学んだ。

ベックさんはスノーアートの魅力を伝えるため13日から、ひがしかわ観光協会の招きで町を訪れている。講座には13人が参加。方位磁針を利用した幾何学模様

の描き方や、きれいに見せる踏み固め方などを座学で学んだ後、雪の積もった田んぼを活用しておのおのが考案したデザインで実践する。完成した作品は、小型無人機で撮影して楽しむ。団体制作する際のコツについて、ベックさんは「一つの枠の中を踏み固める際は、1人だけで担当すると足跡の大きさがそろってきれいに見える」などと説明した。

参加した大雪山旭岳ロープウェイ営業部の国井尚也さん(35)は「講座で知識を深めて、いつか大雪山系の



標高の高いところにスノーアートを描いてみたいです

ね」と話した。

(高田かすみ)

幾何学模様のスノーアートの描き方について解説するサイモン・ベックさん

雪原 踏み描く幾何学模様



【東川】雪原を踏み固めて模様を描く「スノーアート」の道内初の制作体験会が18日、町内で行われた。旭川市と近郊から、小学生から50代までの9人が参加。指導員とともに、真っ白な雪面に30センチ四方の幾何学模様を一つ描いた。

(山村晋)

スノーシューを履き、雪を踏み固めながら模様を描いたスノーアート体験会
(野沢俊介撮影)

東川で道内初 スノーアート体験会

ひがしかわ観光協会が主催。初めに町森林体験研修センターで講習会を実施。第一人者の英国人サイモン・ベックさん(58)から、分度器付きコンパスやロープを使った模様の描き方や、模様をつないだり、影を付けたりする手法を学んだ。その後、2班に分かれ、指導員6人とともにそれぞれデザイン図を作った。

参加者と指導員は、スノーシュー(西洋かんじき)を履いて、キトウシ森林公園そばの雪原へ入った。歩数を数えて歩いたり、角度を測ったりしながら、直線や円などを描いていった。大きな円と三角形を組み合わせた幾何学模様が、1時間ほどで完成した。

参加した旭川市の保育士福田なおみさん(48)は「予想以上に面白い。真っすぐ歩くのが難しかった」と笑顔で話した。

北海道新聞

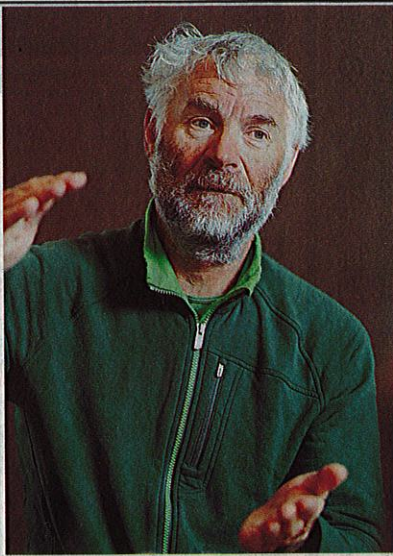
(旭川・上川版)

2017年(平成29年)2月19日(日曜日)

2017年(平成29年)2月26日(日曜日)

ひと 2017

サイモン・ベックさん



「スノーアート」を考案した英国人の芸術家

広大な雪原をスノーシューで黙々と踏み固め、幾何学模様を浮かび上がらせる「スノーアート」を考案した英国人の芸術家。フランスを拠点に、米国やカナダなど10カ国以上で制作しており、2月中旬には道内初作品を上川管内東川町のゴルフ場に一人で描いた。100以四方の雪の結晶のような10角星。6時間をかけたが、「細部にスレがある」と悔しがった。

英オックスフォード大で工学を専攻。地図とコンパスを手に野外の中継点を巡り、時間を競うオリエンテーリングの地図技

師となった。転機は2004年。フランスのスキーリゾート地に別荘を購入した際、何かスポーツを始めようとして思いついたのがスノーアートだった。

雪上に描く幾何学模様は子どもたちから好まれた図形。イメージを基にコンパスで方角を定め、雪原に目印を置き、1歩60センチ、1分間93歩と決めて歩く。「主なデザインは5〜16角形に肉付けしているだけ。最初からコツはつかめた」

これまで250を超す作品を手がけた。企業の依頼も受け、昨年はチリでメキシコのビール「コロナ」のロゴマークを制作した。達成感を味わえるのは作品を撮影した写真を見た時で「完成直後は疲労感しかない」。制作中の食事は目印に使い、エネルギー効率が良いというバナナとコーラ。「雪に恵まれた北海道は制作のチャンスが多い。また来たい」。58歳。

(高田かすみ)

留学生たちがスノーシューで踏み固めて描いた「スノーアート」(館山 国敏撮影)



東川 スノーアート 留学生が挑戦

【東川】旭川福祉専門学校で日本語を学ぶ留学生22人が4日、町内進化台の同校グラウンドで、雪上を歩いて踏み固め、幾何学模様を描く「スノーアート」に挑戦した。参加者はスノーシューを履いて五つのグループに分かれ、円や三角形、市松模様などを描いた。

スノーアートは、雪のない地域から訪れた人たちが気軽に楽しめて思い出に残る体験の一つとして、ひがしかわ観光協会が注目。昨年2月に英国人の第一人者サイモン・ベックさんを招いて制作会を開いた。その時、「コンパスで方角を、歩数で長さを確かめる」「縁をはっきり踏んで影をつける」などの作り方のコツを学んだ自然ガイドらが今回、講師を務めた。

ハート形を仲間と共に描き終えた台湾の留学生曹凱翔さん(24)は「台湾は雪が降らないので新鮮な体験でした」。ベトナム人留学生のゴ・ドゥック・フイさん(26)は「まっすぐ歩くのが難しかったが、楽しかった」と笑顔を見せた。(佐藤元治)